

古賀：司会・進行

Q1：フォークソノミーについて、類似タグが重複し使いづらいことがある。また、タグクラウド等見せ方の工夫について何か案はあるか。

清田：フォークソノミーにはコントロールの点で問題があり、表記ゆれを防止するアルゴリズム等、技術的な手立てを併用する必要がある。フォークソノミーと件名標目表等との関連付けが解決策の一つ。万能なシソーラスは存在せず、検索には検索のためのシソーラスがあるべき。

田辺：一般ユーザーは限定的な使用が多くあまり期待が持てない。それよりはフォークソノミーを件名標目表の補完・拡充に利用する方向に期待している。

清田：色々なレベルの組織化があってもよい。

古賀：件名標目表の問題点はどうか。

渡邊：二つ存在するということが問題。どちらも完璧ではないので、トップダウン的な方法だけでは解決できない。

古賀：トップダウンとボトムアップを組み合わせた方法を考える必要がある。

Q2：「メタ・データの相互運用性・他のコミュニティとの連携可能性」について具体的に知りたい。また、田辺先生には様々な場所でメーリングリストのあり方についてご意見を仰っていただきたい。

渡邊：第一に MLA 連携が考えられる。RDA は区切り記号の側面とデータ要素の側面を切り離している。

清田：表記ゆれの解決等、技術的な面で努力の余地があると感じる。但し、2%のミスが受け入れられるかどうかという点では、ユーザーと目録作成者との間でズレがあるかもしれない。

田辺：ENJU は XML での出力に対応しているが、現在連携する相手は見えてこない。Wikipedia は有力な連携先候補。

古賀：メーリングリストについてはどうか。

田辺：Google での検索結果が国内外で全く違う。国内ではアーカイブはおろか、その存在自体もわからないことがある。せめてログ程度は公開してほしい。

古賀：国立国会図書館のお考えを伺いたい。

安藤：オープン化は実現すべき。委員会等の参加者からの発信もあって良いが、館内でも意見を上げていきたい。

Q3：データモデルの側面を強調しすぎると、インターフェイス面が疎かにならないか。CATP のモデルはいつまで続くのか。

渡邊：インターフェイスは重要であるが、データモデルさえ確定していれば変更可能。CATP については代替として何があるのか。MARC21 も適切ではないのでは。

11/27 第2回講演会パネルディスカッション要約

- 田辺**：FRBRの「関連付け」という発想を大切に、利用者向けのインターフェイスを考えていく。CATPはXMLに改良してほしい。
- 清田**：アフォーダンスに注意が必要。また、インターフェイス開発という作業は多人数が関与することが困難なものである。
- 古賀**：最後に講師の方々から「今後考えて欲しいこと」をお話しいただきたい。
- 田辺**：Project Next-Lはボトムアップ式のプロジェクトで、お金も人も無いところからスタートした。大規模図書館の考えを知りたい。
- 清田**：Wikipediaから学べる点が多い。ボトムアップ的な新しいアプローチは既存の努力を無にするものではなく、その価値を高めるもの。自分の研究がその一助となればと思う。
- 渡邊**：図書館目録の付加価値は典拠コントロールではないか。図書館職員は本日の講演でお話のあった様々な仕組みを見、また知った上で今後のあり方を考えて欲しい。
- 古賀**：今回の講演会を踏まえて、参加者には今後の図書館システムのあり方、利用者に対してのあり方、そして情報発信のあり方等についてお考えいただきたい。

以上